ミュージアム通信

小川原脩記念美術館　☎21-4141
観覧料：一　般　500円（400円）
高校生　300円（200円）
小中学生　100円（50円）

倶知安風土館　☎22-6631
観覧料：一　般　200円（100円）
高校生以下、美術館観覧者無料

開館時間は9時～17時
入館は16時30分まで
※（　）内は10名以上の団体料金
2月の休館日　毎週火曜日（11日を除く）
12～15日
（15日は美術館のみ休館）

いざ、鎌倉へ

久しぶりの鎌倉、10㍍をはるかに超える大仏様に新年のご挨拶をしてきました。ここに鎮座すること770年。時の移り変わりを高みから眺めてきたわけですが、さぞや拝観者の様変わりには、驚いていることでしょう。この日も、ひときわ目立っていたのは他国から来た人々。皆さん、実に熱心にご覧になっていました。恐らくもう、日本人とか外国人とか、改めて声を上げる時代ではないのでしょうね。それは、この美術館でも常々実感していることではありますが。

館長　柴（つとむ）勤

展覧会のお知らせ

■企画展示

開館20周年記念展「鼓動する日本画　CONNECT-MOVE」

道内在住の日本画作家7人と道内外の招待作家による企画展。日本画だけでなく、書、立体造形、漫画、アニメーション、イラストレーションなど幅広いジャンルの作品から、従来の概念を超えた日本画の世界をお楽しみいただきます。

会　期：2月16日(日)～4月12日(日)　会　場：第1展示室

人気投票がつくる展覧会　小川原脩展「私が選ぶ小川原脩」

皆さんが選んだ1点1点に思いを巡らせながら、皆さんが主役の「小川原脩展」をどうぞお楽しみください。

会　期：開催中～4月12日(日)　会　場：第2展示室

くっちゃん美術展　第61回麓彩会展＋くっちゃんART2020

会　期：開催中～2月11日(火)　会　場：第1展示室

アート・イベントのお知らせ

■土曜サロン

アート探訪〈みて・きいて〉37～ポスト印象派⑥～
「内面へのまなざし～モローとルドン」

日　時：2月1日(土)14時～15時
お話し：柴　勤（当館館長）　会　場：当館映像ルーム（無料）

世界美術館紀行X～フランス各地～
「シャガール美術館／シャンティイ城／ロートレック美術館」

日　時：2月8日(土)14時～15時30分
お話し：柴　勤（当館館長）　会　場：当館映像ルーム（無料）

■書のパフォーマンス

新たにオープンする日本画の展覧会には、書の作品も含まれています。久保奈月さんは共和町出身のデザイン書家。お楽しみに。

日　時：2月16日(日)10時30分～
パフォーマー：久保奈月さん　会　場：当館ロビー（無料）

■ギャラリー・トーク

「鼓動する日本画」展

出品作家の皆さんが創作の背景、作品への思いを皆さんに直接語りかけます。

日　時：2月16日(日)13時～　お話し：出品作家の皆さん　会　場：当館第1展示室（無料）

■アート・シネマ館

「セザンヌと過ごした時間」2016年（114分）／フランス（字幕）

画家セザンヌと文豪ゾラ。二人の40年にわたる交友を感動的に描きます。

日　時：2月22日(土)14時～16時　お話し：柴　勤（当館館長）　会　場：当館映像ルーム（無料）

■アート・トーク

「北の日本画～英遠と球子」

北海道出身で日本画壇を代表する岩橋英遠と片岡球子。ともに従来の日本画の伝統を凌駕（りょうが）する斬新な世界を確立、文化勲章を受章するなど大きな足跡を記しました。

日　時：2月29日(土)14時～　お話し：沼田絵美（当館学芸員）　会　場：当館映像ルーム（無料）

感動一点の場

『無題』
1976年　小川原　脩　画

小川原脩が描く犬の中でも、リラックスした雰囲気が漂う一点です。なぜそのように感じるのでしょう。犬たちの仕草もありますが、芽を出しかけたタマネギの存在があるのではないでしょうか。冬も終わりに差し掛かる頃にお台所の片隅で見かけるこの姿、ほんのりと温かな空気に変わっていく季節を感じさせます。

描かれているものは至ってシンプルで、1970年代の小川原作品に見られる画面を二等分する濃紺と茶の背景に、黒い犬と白い犬とタマネギの3者のみ。白い犬が寝そべりタマネギにじゃれて遊んでいたところを、その背後からもう一匹の黒い犬が覗き込み、その気配に白い犬は顔と尻尾を持ち上げて振り向きます。犬とタマネギの不思議な組み合わせから、私は犬猫などに起こる「タマネギ中毒」を連想しました。この中毒については、日本では1975年に北海道大学の家畜病院で初めて確認された病気だそう。制作年も近く、また北大で講師をしていた小川原はなにかしらこの新しいニュースを取り入れたのかもしれません。「私が選ぶ小川原脩」展にて展示中です。

文：沼田　絵美（小川原脩記念美術館　学芸員）

ふるさと探訪

—効率向上の革命児、窓鋸（まどのこ）—

442回

鋸（のこぎり）の歯の作りには2つのタイプがあります。1つは縦引きと呼ばれるタイプ。木の繊維に沿って削るように切る作りで、製材に向いている鋸です。もう1つは横引き。木の繊維を断ち切るためのカッターのような歯が交互についているのが特徴で、伐採に向いています（写真①）。明治の倶知安で伐採に使われた木挽（こび）き鋸（のこ）は縦引きタイプだったため、木の伐採には苦労も多かったことでしょう。

倶知安風土館の収蔵庫にはいくつもの大きな鋸が並べられていますが、「會津住 中屋〇〇」と銘の彫られたものが良く目につきます。福島県会津地方は全国的に有名な鋸の産地で、北海道でも会津産のものが数多く使われました。「中屋」は屋号で、鍛冶屋の多かった会津でも有名な鍛冶屋でした（現在も経営しています）。

この中屋、大正も後半に差しかかったころ、画期的な鋸を開発しました。それが窓鋸です（写真②）。細かい横引きの歯と、その間に深くえぐれた窓を開けることで、木を切る時に出る木くずを溜めて、目が詰まって切れにくくなるのを防ぎました。窓の1つ手前の歯だけ縦引きにすることで、窓に木くずを集めやすくする工夫も凝らされています。木にあたる歯が少ないことで、抵抗も減って作業の効率を格段に向上させました。最初の頃、窓は6～8本の歯に1つの間隔で開けられていましたが、その後4本に1つ、2本に1つと窓の間隔が詰められ、改良されていきました。昭和30年代、機械化された道具が普及するまで、伐採、製材と多くの作業を支えました。

①木挽き鋸と窓鋸の歯の比較

②窓鋸

文：小田桐　亮（倶知安風土館　学芸員）